全カリ運営委員としての２年間で感じたこと

山口　和範

全学共通カリキュラムの運営委員として２年、また、総合Ｂの「データの科学」の科目責任者としてこの一年を過ごした。全カリ科目の担当者として新鮮であったことは、普段接することのできない他学部の学生と触れ合うことができたことである。担当した科目では、実際の社会でのデータ活用について，現場からの生の声を学生に届けること，また，それにより学生のデータ分析や統計への関心を高めることを目的とした。登壇していただいた講師の方々は，日本統計協会，新聞社，外資系製薬会社，シンクタンク，生保の情報システム，及びソフトウェア会社でご活躍の面々である。限られた時間での講義ではあったが，出席した学生からは好意的な感想が寄せられたことや，講義終了後も質問があいつぐなど，関心を呼びおこせたとの思いで，講義を終了することができた。朝１時限目の開講であった影響かもしれないが，出席した学生は非常に熱心で，立教の講義で話題になっている授業中の私語などは全くといっていいほど見られなかった。また，１年生が多いのだろうと思っていたが，予想に反し３年生の受講が多かった。後期の開講で３年生はこの後就職活動を控えていることもあるせいか，仕事の内容に関する質問もあった。また，学部によっては，このようなデータ分析にかかわる講義が全くないため，このような世界があることを知りありがたかったとか，専門科目として統計を学習していたが，その必要性や理解がより深まったなど各学部ごとに特徴ある感想を得た。専門科目との関連や自分の専門と別の世界を垣間見たなどという，全学共通カリキュラムの趣旨と適合すると思われる感想が数多く寄せられたことは，この科目の開講の責任者としては喜ばしい限りであった。

私自身は統計学が専門で，「データ」を取り扱う人々とさまざまな方面で分析の相談にのったり，共同研究を行ったりしているが，そのときに常々思うことは，20年ちょっと前の教養部時代に受けた教育のありがたさである。そもそも統計は全ての科学における共通語であるといわれる。また，応用分野のない統計学は全く無意味であり，他分野との連携が統計学の研究教育においては非常に重要である。そのため，統計学以外の学習も行

えるような機会を与えてくれた当時の教養部教育に感謝していると共に，もう少ししっかりとやっていればという思いも強い。

最近，情報公開の必要性が各所で唱えられているが，情報公開に際して特に教養教育の必要性が強調されるであろう。単に情報が公開されるだけでは何の意味もない。そこで，公開される情報の意味が正確に理解できてこそ，情報公開が真の意味を持つ。そのためには，われわれが送り出す学生がその情報をきちんと理解できるためのリテラシーが要求されるのである。大学の果たすべき大きな役割のひとつがそこにあると思われる。

日本のほとんどの大学から，教養部自体は消えつつあるが，学生にとっての教養教育の必要性は逆により高まっているといえるであろう。教養なくして専門教育はありえないというのは間違った考え方ではないであろう。1991年の大綱化の意義について深く議論するつもりはないが，そこでの改革が学生のためであったとは考えがたいし，学生のために専門教育同様にきちんとした教養教育を提供することは，今の大学に課された大きな責務であろう。幸い立教大学では，さまざまな方々の努力により，順調に全学共通カリキュラムが運営され，他大学に見られる教養部解体による教養教育への痛手というものはさほど感じられない。ただし，そこには専門学部の教育を行いながら，さらに全学共通カリキュラムを別途に担当するという，負担増の問題をはらんでいると思われる。今後質のよい教育を学生に提供し続けるには，この負担の問題に対し，きちんとした対処を早めにとることが大切であろう。

また，私がもうひとつ全学共通カリキュラムへ期待しているのは，文系理系の垣根を超えた履修が可能な点である。現在は，コンピュータやネットワークの急速な発展に伴う高度情報化の時代である。このような時代において，社会に出て仕事を行う際に，文系理系の区別は全く持って意味がないが，大学入試における文系理系の存在が，高校教育をゆがめ，その影響が多大に大学教育に現れていると思われる。環境問題を話題にしようにも，理科の知識の乏しさより深い議論ができなかったり，数学嫌いがそのままなぜか数字嫌いになり，統計数字をみること自体を毛嫌いする学生もいる。全学共通カリキュラムにおいては，文系理系の垣根なく，多様な科目が開講されており，このような問題点をうまく解決してくれるのではないかと期待している。もちろん，得意分野を深く掘り下げることは非常に大切なことであるが，現在のようなグローバル化の時代，蛸壺的な教育は時代遅れであろう。大学から送り出す学生の1つの理想像は，広い教養を持ちつつ大いに武器となる専門を持つということであろう。広い教養とは，文系理系の垣根のない世界である。また，全学共通カリキュラムのように別の学部の学生と共に学ぶことは，自分と別の得意分野を持っているものと触れ合える機会でもあ

り，相互に刺激的であるはずである。このような機会は，専門教育ではなかなか実現しがたいので，この点を強調したカリキュラム運営もぜひお願いしたい。

もちろん，全学共通に全学部学生を対象に開講されるということでよいことばかりではないことも承知している。最大の問題点は，大人数の教室が出来上がってしまうということである。これについては，来年度から抽選という形での対策がとられた。座席もない履修者が出ることを避けるという意味ではもっともなことであるが，次善の策であることは間違いない。学習意欲による履修希望の芽までをも摘み取っている可能性も否定できない。2003年度の応募状況の分析を十分に行い，負担増や教室数の問題を何とか克服して，複数開講などの対策を2004年度以降のカリキュラムで行っていただきたい。

情報関連科目についても触れておきたい。情報科学教育研究室の努力により当初より充実してきたことは事実であるが，大学全体における情報科学教育へのニーズという観点から，その量的不足は否めないのではないだろうか。v-campusやメディアセンターの設立などハード的な充実は他大学に引けをとらないと思われるが，情報教育にかかわる教員の絶対数が足りないのではないかと外から見ていて感じられる。現代のような情報社会にあって，情報リテラシーはもちろん高度な情報技術に関する教育を提供できる場が立教大学にも不可欠であり，それを提供できるところは全カリ以外にはありえないであろう。情報科学教育研究室とメディアセンターの協力や融合などを含め，情報関連教員の人員の拡充がぜひ必要であると思う。

この2年間，全学共通カリキュラムの運営委員として，他学部の先生方や全カリの事務の方々，他の組織の事務の方々といろいろな意味で意見交換をしてきた。他の学部や全カリのことを知ることで，学部の独自性の重要性と共に，不必要な独自性の排除の重要性も感じることができた。そのような意味で，全カリの運営委員を務めることでは非常によい勉強にもなった。一方，会議の多さや夜の会議では，小さい子供を抱える親として，閉口することもかなりあった。今年度から，運営委員会は4時30分からの開催となり非常に助かった。今後とも会議の持ち方や運営時間については十分な議論をしていただきたい。これは，全カリに限ったことではないが，終了時間が固定された午前中や昼休みの会議があってもよいと思うし，必ずしも長い会議がよい結論に到達するとは限らないことは，みんなが知っていることであろう。

やまぐち　かずのり
（本学社会学部教授，
2002年度全カリ運営委員）